

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡 —花原 勉 選手—

依 田 充 代 (スポーツ社会学研究室)
清 宮 孝 文 (スポーツ社会学研究室)

【経歴】

1959年4月 日本体育大学体育学部体育学科入学
1963年3月 日本体育大学体育学部体育学科卒業
1964年4月 日本体育大学助手
1969年4月 日本体育大学専任講師
1975年4月 日本体育大学助教授
1985年4月 日本体育大学教授
2010年4月 日本体育大学名誉教授

【競技歴】

1964年 オリンピック東京大会 グレコローマン52kg級 優勝
1967年 世界選手権ブカレスト大会 グレコローマン57kg級 3位
1962年 世界選手権ジャカルタ大会 グレコローマン52kg級 2位

本稿は、「研究プロジェクト：日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した、メダリストへのインタビューをもとに構成されている。

本インタビューは平成29年11月24日(金)に花原勉氏にお話を伺った。

1. 競技との出会い

中学2年からはじめた柔道は姿三四郎への憧れと、「人間は強くなければいけない」といった願望からであった。豊浦高等学校で恩師の中野重吉先生と出会い、江戸道場に稽古に通うようになると、柔道の面白さがわかるようになり、次第と強くなっていった。しかし、体があまり大きくないため道場同士の対抗戦で見かける体格の良い選手を見ているうちに、柔道はある程度の体格が必要であると思うようになり、姿三四郎の世界への壁が見えるようになっていった。そんな時、高校3年生になる春、練習帰りに立ち寄った映画館で見

たムービー・ニュースの中で、メルボルン・オリンピックで活躍した日本のアマチュア・レスラーの笠原さん、池田さんの試合を見た。日本レスリング会はヘルシンキ・オリンピックで金メダルを獲得した石井さんの後、このメルボルン・オリンピックでは2つのメダルを獲得し、まさにアマチュア・レスリング日本の歴史がここからはじまったという時代であった。飛行機のタラップからツリバン姿で、メダルを首からかけて降りてくる誇らしげな選手たちを見て、柔道と似た格闘技で体重別の階級制があるこのレスリング競技なら自分にも活躍する場があるのではないかと、世界で戦える、世界を取れる、といった思いがこみ上げ

てきたと話してくれた。

2. 日体大の思い出

レスリングをやろうと決めた花原氏は将来体育教師になるためにはどの大学が良いかを調べた結果、日本体育大学への進学を決めた。当時の定員は180名と少なく、補欠合格となったため、補欠金を支払っての入学であった。大金を支払って父は親戚中から借金をしてやっとの思いで1959年の4月に日本体育大学に入学した。

しかし、当時の日本体育大学のレスリング部は2部で2位～3位くらいの実力で、他競技からの転向組が多かったため、小中学校の体育授業で使ったようなズック記事の細長いマットを体育館に敷き詰めての練習であった。柔道とレスリングの違いは着衣を掴むなど、柔道で言えば組手ができないことであった。どうやったら相手を掴まえられるか、スピードの速さが柔道とは違い、自分より小さな相手にも勝てなかった。

1年以上も悩み続けたその答えは解剖生理学の中にあった。首、脇、肘、手首、腰、股関節、膝、足首、この8つの関節を支点にして、相手を崩したり技を掛けたりすることができることがわかった。大学2年(1960年)の夏合宿、独学でレスリングの基本を学んできた花原氏はこの頃から自信が湧いて、ますますレスリングが楽しくなると述べている。そして、その年の12月、全日本選手権(グレコ・フライ級)で最初の金メダルをとり、日本体育大学レスリング部の華やかな歴史をスタートさせた。

1961年、憧れのナショナル・チームの合宿に加わり、JAPANのユニフォームを支給された時の喜びは言葉で言い表せないほどの感激であった。このナショナル・チームで東京オリンピックまでの3年間に60数回の合宿と遠征を行ったが、当時のレスリング協会会長の八田氏はマナーに非常に厳しく、とても良い勉強をさせていただいた。

3. 東京オリンピックでのメダル獲得

レスリング選手として一番辛かった思い出は減量であった。大学を卒業して日本体育大学の助手となった花原氏は1964年5月に本番へ向けての最後の総仕上げのため、40日間の東欧諸国の遠征を行った。ブルガリアのソフィアでの12時間で4.5キロの減量を経験し、その後も試合に際して常にこの「減量」が花原氏を苦しめた。

遠征から帰国し1ヵ月後の7月にオリンピック最終選考会を兼ねた全日本選手権大会が行われた。その前年、1963年の世界選手権代表選考会をダントツで勝ち抜き優勝した花原氏であったが、発表された代表メンバーの中に花原氏の名前がなく悔しい思いをした。そして東京オリンピック最終選考会でも優勝をしたが、代表メンバーが正式発表された合宿初日、またもや代表決定メンバーに花原氏の名前はなく、決定戦メンバーグループに入っていた。3日後の決定戦まで6.5キロの減量が必要であった。48時間で50グラムのアイスクリーム1個と卵1個しか口にせず、最終日は何も口にできず、この時の減量も苦しかった。しかし、見事に勝利を収めて東京オリンピック代表選手となった。

東京オリンピックでは、これまで試練を経験してきたおかげで、決勝まで7回戦を戦い取られたポイントはわずか1点、心身共に最高のコンディションの状態で戦うことができた。また、この時に付き人としてついてくれた、日本体育大学の後輩である勝村氏にも感謝していると当時を振り返って語ってくれた。

4. その後の人生

東京オリンピックが終わった後に、花原氏は階級を1つ上げてメキシコオリンピックを目指すことになった。オリンピック金メダリストの意地と自信で全日本優勝を飾り、日本国内ではその座は揺るぎないものとしていたが、体力を蓄えられな

い年齢になってきていると実感していたという。1967年ルーマニアで開かれた世界選手権では決勝リーグまで残ったが、左肩を負傷して結果は3位であった。負傷しての3位なのだから、翌年のメキシコオリンピックでは必ず勝てると思っていたのだが、最終選考会1週間前に右足靭帯断裂で2階級制覇の夢は破れた。

その後はレスリング協会の要請でコロンビアにレスリングを教えに行くことになり、日本体育大学を休職して、1967年に結婚した奥様と1969年に生まれた長男と、奥様のおなかにいる長女も一緒に渡航した。しかし、2年の予定で指導に行ったが、全く給料を支払ってもらえず、日本人の会社に勤める方のお家に泊めてもらったり、ホテルに泊まったりしたが、結局は持っていた時計やカメラを売って食事に代えるしかなく、11か月で断念し、アメリカの知人宅をまわって帰国した。

日本体育大学に戻ってからは、1974年のイスタンブール、1975年のミンスク、1977年のローザンヌ、1979年のサンディエゴ世界選手権において金メダルを獲得し、1976年のモントリオール・オリンピックで金メダル、1984年ロサンゼルス・オリンピックで銅メダルを獲得した高田裕司氏や、その後に日本体育大学レスリング部の監督となる藤本英男氏などの指導にあたった。多くのオリンピック選手を輩出した日本体育大学において、花原氏の指導は、後に続く後輩たちに大きな希望になったと思われる。

ナショナル・チームではコーチとなり八田氏の指導を継承しつつ、ミュンヘン・オリンピック(1972年)を目指した。バルカン諸国やソ連への遠征、他国のナショナル・チームとの合同合宿、多くの場面で花原氏は「食」について日本との違いを感じ、「食」について学び続けた。その後、1986年のソウル・オリンピックにおいて日本レスリング協会は新体制をスタートさせ、花原氏は強化委員長に任命される。そこで選手たちと三食を共にする500日合宿を断行し食の環境を整えた。さらに、選手の意識改革のためにメンタル・

トレーニングの実践、音楽療法や真夜中のスパーリングも取り入れていった。そして、金メダル二つ、銀メダル二つを獲得、見事にレスリング日本の復活を果たした。

また、2006年には認定特定非営利活動法人日本ブラインドマラソン協会の理事長、2011年からは会長を務め、現在は名誉会長となっている。

5. 後輩たちへ一言

人間は五感からの情報により次の行動を決める。この決断が早ければ早いほど人より有意に立つことができる。仕事も、練習も、目的・目標を持って五感を総合して日々の訓練を行って欲しい。そして、人体と食の相関関係について認識して欲しい。

確固たる目的意識を持って食と取り組む。ここには味覚と嗅覚が関係する。

確固たる目的意識を持って技を盗む。ここには視覚が関係する。

確固たる目的意識を持って教えを請う。ここには聴覚が関係する。

確固たる目的意識を持って練習を行う。ここには触覚が関係する。

【参考引用文献】

花原勉：金メダルレストラン 勝利への食事学、ベースボール・マガジン社、1995。

